

『ロクな孤独死』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



人には「孤独死」する権利がある、と僕は思う。いや、それどころか「野垂れ死に」にする権利だってあると思う。かの西行法師だってこう詠んだではないか、“願わくは 花の下にて 春死なん その如月の望月の頃”。人に「死ぬ権利」があるかどうかは繊細な議論を要する難しい問題だけれども、安楽死のように人工的・侵襲的に命を縮めるということではなく、自然に果てていく命の最期をどこどのように迎えるかということは、その人の自由だと思う。「孤独死」という言葉に含意されがちなネガティブなイメージを抱くこともそれはそれで個人の自由だが、「孤独死」は必ずしもネガティブで避けるべきもの、というわけではない、と僕は考える。

「孤独死」上等。俺は家族や友人なんて面倒なものはいらぬ。俺は何よりも自由を愛する。縛られたり指図されたり管理されたりするのは嫌。という人がいてもいいし、実際にそういう人はいる。人生いろいろ、人それぞれ、だ。もちろん家族に囲まれて、「お母さん！」とか「おじいちゃん！」とか言われながら己の人生を閉じたいという人もいるだろうし、やはり多くの人はずういう考えだろう。かくいう僕もどちらかというそっちかもしれない。でも、僕も管理されるのは嫌だし、自由ではありたいと思う。好き勝手な形で生き死なせてもらいたいと思う。

今回取り上げる室田さん(仮名)は、元気な頃は料理人だったらしい。ゴルフ場の厨房で働いていたこともあり、青木功と一緒に飲んだことが自慢で、訪問し始めた頃に何度もその話を聞かせてくれた。まあ、一緒に飲んだ、というよりもたまたま一緒に場に居合わせた、というだけのようだったけれども、そこはあまり詳しく問いたださず、すごいですねえ、と言うにとどめた。生家はお寺さんだったようで、確かに見ようによっては(よく言えば)高僧のような趣もあった。要するにつかみどころのない飄々とした人物だった。廃屋と呼ぶにふさわしい借家に一人で住み、部屋の中も建物の外観と見事に調和していた。要するに究極に雑然とした住まいだった。訪問した時も、泥酔して裸で寝ていることもあれば、煙草をうまさうにブカブカふかしていることもあった。食べかけの古い食材が万年床の脇に転がっていたりもしたが、不思議と腹を壊すことは多くなかった。室田さんにとってそこは自由の王国だった。76

歳の時に食道癌の診断を受けたが、本人は治療を拒否し、退院することを希望し、僕らが介入することになった。関わり始めて3年以上のほとんどの時間、食道癌の診断が間違いではなかったかと思うほど元気に自由闊達に過ごしていた。ところが、亡くなる数週間前から急速に痩せ弱ってきた。あっという間にトイレに行くこともままならない状態になり、訪問看護の回数を増やしてもらい、有能なケアマネは率先してヘルパーさんが頻回に入ってくれるよう速やかに調整してくれた。亡くなる前日、訪問看護師から連絡があり、血圧が下がっており、やや朦朧としているとのこと。直ちに駆け付け、本人に入院を勧めてみたが、本人はきっぱり「嫌だ」と。一般的に考えれば快適とは言い難いゴミに埋もれたその部屋にとどまりたいと室田さんは明確に訴えた。であれば、そこでできることをするまでだ。こういう場合、本人の願いに逆らっても無理矢理に入院させて濃厚な医療を施すのが正しいことなのではなくて、本人の思いを尊重してできるだけ本人の希望に沿うようにするのが正しいことだ、と僕は思う。「孤独死」も本人は覚悟の上だ。有能なケアマネは電動ベッドをその日のうちに手配してくれた。ゴミを片付け、人手を集めて本人をいったん部屋の外に担ぎ出し、何とかスペースを確保して電動ベッドを設置し、何年ぶりかで清潔かつ快適な布団で横になった室田さん。果たして、その日の夜、恐らくは病変部から出血したのであろう、翌朝、室田さんは冷たくなって発見された。ふかふかのベッドの上で、口から胸にかけて赤黒い血で汚れていたが、その顔は穏やかに微笑む高僧のような尊顔だった。室田さんらしいロクな最期だと思った。弱り始めて数週間で最後まで行ってしまった、とも言えるし、亡くなる数週間前までお元気に普通の生活を送ることができていた、とも言える。僕としては、どちらかという、後者の捉え方が好きだ。室田さんは、亡くなる数週間前まで好き放題に普通の暮らしをし、自由闊達に自分の人生を最後まで生き抜いた。自分の生き方を貫いて生き、死んだ。これを「孤独死」と言うなら孤独死も悪いものではない。少なくとも僕はそう思う。皆さんはどう考えるだろうか？もちろん、色々な考え方があっていいと思っている。僕と同じように感じなくても、もちろん構わない。